



ハズレスキルで無双する

異世界に転生した元ゲーマーは

クズ貴族 転生記

最下位

3

こはるんるん

ill. ふつー

◆ ◆ ◆

KUZU

kizoku

◆ ◆ ◆

◆ジゼル◆

「七公爵」と呼称される
七体いる大魔族の一族。
ヴァイスに敗れ、
その配下となった。

◆テティス◆

海洋国家ネレティアの
王女であり、「水巫女」という
スキルを持つゲームの重要人物。
ヴァイスに突然求婚してきて……

◆ヴァイス◆

本作の主人公。
元廃ゲームの男がゲームの
クズ貴族に転生した姿。
原作知識を活かして
死亡エンド回避を目指す。

◆アレン◆

救国の勇者。
お人好しで、悪を許せない。
逆境に強い。

◆エレナ◆

ヴァイスの妹にして「剣聖」。
学園ナンバーズリーの
実力を持つ。生真面目な性格。

◆セリカ◆

ローランド王国の王女。
高貴な振る舞いから、
学園中の生徒の憧れの的。

◆フィアナ◆

王国随一の名家の令嬢。
ヴァイスの元婚約者で
学園最強の生徒。

CHARACTERS

一章 人類史上初の魔物軍団を結成する

ある朝目覚めると、俺は大好きなゲーム【グロリアスナイツ】のクズ悪役貴族、十五歳のヴァイス・シルフィードに転生していた。

ちよつと何を言っているのかわからないと思うが、俺も何がなんだかわからなかった。

問題なのは、このヴァイスは『大魔族【傾国^{けいこく}】のジゼルによって魔族と化し、勇者アレンやヒロインたちによって討伐^{とうはつ}される最悪の運命^{めいめい}』を迎^{むか}えることだ。

しかも一歩間違えれば、俺が大好きだったゲームヒロインたち——ヴァイスの妹エレナや王女セリカが殺されてしまうバッドエンドも有り得た。

俺は前世では、交通事故で家族全員を亡くし、現実逃避のためにずっとゲームに没頭^{ぼつとう}してきた。

だから、この世界の妹エレナから、『グロリアス騎士学園最下位のクズ兄貴』と嫌^{きら}われていようとも、彼女を守ってやりたかった。

幸いにして、騎士の名門シルフィード伯爵家^{はくしや}の嫡男^{ちやくなん}ヴァイスは、【超重量】という、最強クラスのユニークスキルを持っていた。

これと、俺のゲーム知識があれば、破滅の運命を変えられるはずだ。

そう一念発起した俺は、王女セリカが魔族に襲撃される負けイベントを変えた。

俺の力で魔族を倒し、セリカとその護衛のエレナを救ったのだ。

これをきっかけに俺はヒロインたちや、ゲームの主人公であり、いずれは勇者と呼ばれるようになるアレンと仲良くなっていた。

そして、彼らと力を合わせて、大魔族ジゼルを倒したばかりではなく、ゲーム知識を使って、ジゼルを俺の支配下に置くことに成功したのだ。

人間が大魔族を支配下に置くなど、前代未聞のことだ。

この大手柄によって、俺はこの国最強の五人の騎士に与えられる【ザロリアスナイト 栄光なる騎士】の称号を国王から授与された。

さらには、ゲーム時代から好きだったセリカに告白して、恋人同士になることもできた。

運命を変えることに成功したわけだが、まだ油断はできなかった。

なにしろ、ここは人間を食料とする魔族や魔物が跋扈する危険な世界だ。

【七公爵】と呼ばれる大魔族はまだ六人残っており、奴らは人間の国々を侵略しようとしている。前世で家族を失った俺は、もう二度と愛する人たちを死なせないと決意した。

そのために、ゲーム時代には決してできなかったこと——大魔族ジゼルを使って、俺の命令通り

に動く魔物軍団を作ること着手していた。

魔族は魔物に対して力を誇示することで、魔物を従えることができるのだ。

魔族どもは、そうやって手下を増やして、自分の勢力を築いている。

だったら、残りの大魔族を倒し、ジゼルにすべての魔物を支配させてしまえば、この世界に永遠の平和が訪れるんじゃないか？

と考えたわけだが……

【ザロリアスナイト 栄光なる騎士】となった俺は、もはやただの学生ではなく、この国を守る貴重な戦力として扱われるようになっていた。

要するに、自分のやりたいことだけに時間を使えるわけじゃないってことだ。

今は国王の命令で、魔族の国ノクタリアとの国境にあるエルヴァス城塞にやってきていた。



「はぁ、ギリギリの到着の上に、なんやそのズタボロの格好は……」

五人の【ザロリアスナイト 栄光なる騎士】の一人、マエル・ヴォルドランは俺を見て、小馬鹿にしたように頭を振った。

マエルは十九歳の眉目秀麗な貴公子だ。

その背後には、大勢の騎士が付き従っている。

エセ関西弁で話すのは、彼の領地であるヴォルドラン地方のお国柄だった。

魔族は魔物を支配し、ノクタリアという連合国家を築いていた。

エルヴァス城塞は、そんな人類の天敵からローランド王国を防衛する最重要拠点だ。

魔族と魔物は、人間の血肉を好物としており、ノクタリアでは人間は家畜として飼われている。

魔族は人間の国家を侵略して家畜とする人間を手に入れるため、魔物軍団を組織して、侵攻を繰り返していた。

マエルはこの魔族軍の侵攻を阻止するための指揮官として、エルヴァス城塞に約五万の兵と共に常駐していた。

命がけの危険な任務だ。

持ち回りでエルヴァス城塞の城主を任される【栄光なる騎士】と、それに付き従う騎士たちが尊敬されるのは当然だな。

「先輩のワイが十三時ぴつたりに来い言うたら、その三十分前には来て準備しておくのが常識やろ!？」

「すみません。アシッド・スライムの捕獲に熱中して、つい……!」

俺は必死に頭を下げた。

なんだ、その常識は？　と思ったが、前世の社会人経験を活かしてグッと堪える。

これから魔族軍とドンパチやるのに、ここの指揮官であるマエルと揉めるのは避けるべきだからだ。

なにより、戦闘前に防具がボロボロになっている点に関しては、言いわけができないから……ゲームマーだった前世から、ゲームの攻略法や新しい戦術を見つけると、とにかく試したくてたまらなくなるタチだった。

そんな俺が、原作ゲームでは決して実現できなかったこと。

『大魔族ジゼルを使って魔物を従える』ことが可能になったのだから、もはや居ても立つてもいられなかった。

ここ数日は騎士学園をサボって、ずっと森に入り浸っていた。

すべてはアシッド・スライムを大量に捕まえて、魔族軍に効率的に対抗できる魔物軍団を作るためだ。

アシッド・スライムは【強酸】という特殊能力を持っていた。

酸を吐き出して、敵の防具や身体を溶かしてダメージを与えるのだ。

そんな連中の相手をしていたのだから、俺の装備はボロボロ。

肌もいたるところが焼けて、ヒドい有り様になっていた。

まあ、その対価は十分得られたが……

「アシッド・スライムやと？ 雑魚モンスターやないかい！ そんな連中を相手にして、今さらレベル上げもないやろ!!」

「いえ、これは……」

俺が説明しようとなると、マエルは大げさに肩を竦めてみせた。

「はっ！ まったく、ワイらの任務はお遊びじゃないんやで。君みたいなのが、栄えある【栄光なる騎士】の一員になるとは、まったく世も末やな。国王陛下も何を考えておられますのやら」

「まったくマエル様のおっしやる通りです」

「小僧、史上最年少で【栄光なる騎士】に選ばれたからと調子に乗っておったら、ここではすぐに命を落とすぞ！」

「しよせんは学生だな。騎士たる自覚が足りんらしい」

マエルとその腹心の騎士たちが、俺をせせら笑う。

「せやで。大魔族ジゼルを搦め手で倒したとずいぶん鼻息を荒くしておるようやが。軍団同士の対決では、そないな小細工は一切、通用せえへんで？ 舐めておったらどんな強者でも死ぬ、そんな

地獄がここやー！」

それを理解しているからこそ、入念な準備をしてきたわけだが……

「浮かれとるヴァイス君には、先輩として、まずは現実の厳しさを教えてやらなアカンな。お手並み拝見や。偵察からの情報やと、これからこの城塞に対して約十万のオーク軍団の大攻勢がかけられるようや。魔族はおらんようやが、この数は脅威やね。打って出て、君ひとりで相手してみ？」

「えっ……!?!」

俺は心底驚いた。

「ははっ。さすがにスーパーパーキー君でも、ビビったみたいやね。いくら個人として強くても、十万の軍団を相手にしおったら体力と魔力が保たん。なぶり殺しにされるのが落ちや。同じ【栄光なる騎士】でも、君とワイは同格やない。ここではワイを城主として立てて、ワイの命令に……」

「そいつらを倒したあとのドロップアイテム、全部、俺のモノにしちゃっていいんですか!？」

魔物が落とすドロップアイテムは、魔物を倒した者に所有権があるというのが、この世界の常識だ。

俺は思わず小躍りしそうになった。

実は、このエルヴァス城塞の周辺は、貴重なアイテムをドロップするレアな魔物がやってくる場

所でもあった。

そんな魔物を倒して、貴重な戦利品をゲットできるのは、ゲーム時代では実に美味しかった。
【栄光なる騎士】を輩出した貴族家が富めるのは、ぶっちゃけこのおかげだ。

危険な任務の役得という奴だ。

俺はまだ騎士学園の学生だが、いずれこのエルヴァス城塞の城主を任されるであろう立場。そのため、国王は魔族軍との戦争を早々に体験させるために、俺をここに派遣したのだ。そんな俺の目的は、主に三つ。

- 1、ここでしか手に入らないレアドロップアイテムをゲットすること。
- 2、俺が組織した魔物軍団が実戦で通用するか試すこと。
- 3、俺の魔物軍団を、より強化すること。

「ついでに、オークどもは屈服させて俺の支配下に入れますね！」

故に、これも事前に告げておかねばならない。

俺の支配下に入れたオークを攻撃されたりしたら、かなわないからな。

魔族が敵の軍中にいないなら、ジゼルを使って魔物を寝返らせるのもやりやすいだろう。

ノクタリアの支配階級である魔族は、安全な後方にいて高みの見物を決めているのが常だ。

要塞の戦力を魔物軍団を使って削り、勝てると踏んでから、魔族は仕掛けてくる。

「なんやと……？」

マエルは顔をしかめた。

「太っ腹ですね。さすがは、ヴォルドラン公爵家！」

十万のオーク軍団となれば、60レベル超えの激レアモンスター、オークキングに率いられている可能性が高い。

オークキングを支配下に入れるのもおもしろいが、ここはドロップアイテムを狙うべきだろうな。オークキングの確定ドロップアイテム【蛮王の紋章】は、所持者に全状態異常耐性を与えるという破格の性能を持っていた。

欲しい。なんとしても欲しい！

ゲーマーとしての血が騒ぐというだけではない。

ここは一步間違えれば死ぬ危険な世界だ。

恋人のセリカや妹のエレナを失う可能性を少しでも下げるために、【蛮王の紋章】が欲しかった。
【蛮王の紋章】を回復魔法が得意なセリカに持たせれば、彼女だけでなく、仲間の生存率が大幅にアップする。

セリカが、麻痺や凍結といった状態異常で動けなくなるのを防ぐのだ。

セリカのスキル構成『絶対に死なないド根性聖女ビルド』は、このアイテムを加えることで、より完成度が高まる。

「……それ、本気で言つとるんか？ 君の父上のアルバン殿やて、一人で十万の大軍は相手にできへんぞ」

マエルの声が極めて陰しくなる。

俺の父親、アルバン・シルフィードも【栄光なる騎士】の一人だった。

「舐めているようなら、この際、ハッキリ言わせてもらうが。ワイや部下たちは一切、手助けせえへんで？」

なに……？

俺は国王の命令で、ここに研修に来ているような状態だ。

その俺が窮地に陥つても助けないだど？

原作ゲームのシナリオを思い出す。

マエルは原作ゲームにも登場していたが、プライドが高く、部下をいびる悪癖があった。

「ああつ、そうそう。君が死んだら、ドロップアイテムはみなワイが回収してやるさかいな!?」

マエルは空を仰いで笑う。

彼の部下たちも同調して大笑いした。

性格の悪い奴だな。

あわよくば、俺に死んでほしいと思っているのか？

【栄光なる騎士】同士で手柄の奪い合いや、派閥争いのようなものがあるのは知っていたが、この場合は、少々度を越しているように思えた。

マエルもローランド王国を守る仲間であり、うまくやっていけるのが理想だったが……それは難しいか。

パワハラをしてくる上司の機嫌を取るとパワハラは収まるのか、というと、そんなことはない。俺は前世で学んでいた。

むしろ、こいつには何をしてもいいんだと舐められて、パワハラがエスカレートする。

なにより、俺はパワハラしてくるような嫌な先輩や上司にヘコヘコする人生は、もう送りたくなかった。

なら解決策は一つしかない。

俺がこいつより、圧倒的に強くなれば良い。

なにより、俺が強くならなければ、大切な人たちを守れないからな。

それに、元々、俺の軍団単独でも、大魔族率いる魔族軍に勝てるようであれば、話にならない

と考えていた。十万のオーク軍は、最初の腕試しとしてちょうど良いだろう。

「話は決まりましたね。マエル先輩とこの兵たちの支援は一切受けずに戦って、戦利品はすべて俺のモノにします」

「はっ……？」

マエルはよほど意外だったのか目を瞬いた。

「ジゼル、まずは敵軍の情報収集を頼むぞ！」

俺は背後を振り返って叫ぶ。

「もうあらかた終わっておりますわ、我が偉大なる主様。偵察兵の情報によると、敵はオークキングに率いられたオークのみの軍団。重装兵を使って、雲梯でこの城塞の壁を登ろうという作戦のようね。優雅さの欠片もない力任せの戦術だわ」

「ひゃああああッ！ ジゼル様！」

「もう何でも聞いてください。何でもお答えします！」

すると、俺の使い魔ジゼルが、まるで女王のように兵たちを引き連れてやってきた。兵たちは媚びた口調でジゼルに話しかけている。

雲梯とは、台車が付いた折りたたみ式のハシゴだ。

もっとも簡単に作れる原始的な攻城兵器だった。

これを使い、城壁を登って城塞内になだれ込むというのが、オーク軍の作戦なのだ。

ちなみに、ジゼルの見た目は十五歳ほどの絶世の美少女である。

無論、その実態は【七公爵】と呼称される七人の大魔族の一人だ。

「……って、お前、まさか【傾国】のスキルを使ったのか!？」

俺は心臓が止まるかと思った。

ジゼルは【傾国】という、異性を虜にして支配してしまうユニークスキルを持っていた。

それを俺が跳ね返して、逆に服従させたのだ。

その際、人間相手のスキル行使は厳禁と命令していたのだが……ジゼルを取り囲んだ十数人の兵

たちは、全員目をハートにしていた。

もし、ジゼルが俺の命令を破ったのだとしたら、俺の支配から逃れたのだとしたら、ジゼルを即刻処分しなければならなくなる。

「ふふっ、スキル能力など使わなくても、この私の美貌をもってすれば、殿方を虜にすることなんて、造作もないことですわ」

ジゼルは自慢の銀髪を美しい所作でかき上げ、自信満々にそんなことを言い放った。

こいつの見た目が天使なのはわかるが、それにしてもこの城の兵たちはチョロ過ぎだろう。

まあ、さすがに騎士学園を卒業した貴族たち——兵を統率する騎士たちは、ジゼルに惑わされる

て、造作もないことですわ」

ジゼルは自慢の銀髪を美しい所作でかき上げ、自信満々にそんなことを言い放った。

こいつの見た目が天使なのはわかるが、それにしてもこの城の兵たちはチョロ過ぎだろう。

まあ、さすがに騎士学園を卒業した貴族たち——兵を統率する騎士たちは、ジゼルに惑わされる

ことなく、遠巻きに眺めていたが……

「ですから、ヴァイス様、どうか私の愛を受け入れてくださいいいいッ！」

「おいこら、やめろ！」

ジゼルは叫ぶと同時に、俺に抱擁してきた。

【傾国】の呪い、恐るべしだ。

コイツは俺に、強烈な恋愛感情を抱いている。

だが、俺はセリカに告白して恋人同士になったわけだし、この危ない魔女とイチャコラするつもりはまったくなかった。

「そんなことをおっしゃらずに！ アシッド・スライム狩りのご褒美がまだです！」

「後で、お前の好きな焼きそばパンを買ってやるから、それで我慢しろ！」

俺の顔に頬擦りしてくるジゼルを慌てて引き剥がす。

「その程度じゃ、満足できません！ ずっと二人きりで過ごしているのに、何もなくて私はもう限界なんです！」

「ジゼル様とあんな風にイチャコラしているなんて、うらやましい！」

「ちくしょう！ 胸まで押し付けられているじゃねえか!？」

兵たちが、なにやら殺気立った目を向けてきた。

おい、この城塞での俺の評価が、どんどん落ちていく気がするぞ。

「なるほど、こいつが【傾国】のジゼル。目を合わせた男を虜にするとは聞いておったが……魔性の美しさだけで下民どもの心を掴むとは、さすがやね」

マエルが不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「せやけど、戦闘能力に関しては、【七公爵】の中でも最低という話やないかい。ジゼルがおったとしても、十万の大軍をどうにかすることはできへんぞ？」

奴は、傲然と上から視線で言い放つ。

「最後のチャンスや。二人そろって頭を下げて、ワイの靴の裏を舐めたら、子分として大事にしてやろうやないかい」

俺はちょっと呆気にと取られてしまった。

こいつはどうしても俺を屈服させたいらしいな。

「はじめまして。【栄光なる騎士】の一人、マエル・ヴォルドラン殿ね」

ジゼルは俺から手を離して、カーテシーをしてみた。

貴族令嬢顔負けの気品と優雅さだ。

「ご心配には及びませんわ。オークキングの下につく敵の部隊指揮官、オーク・ジェネラルたちを

【傾国】のスキルで虜にしてしまえば、オーク軍は指揮系統を乱されて瓦解します」

「なに……?」

「オークキングは、支配下に入れたオークの数が多ければ多いほど、戦闘能力を増すユニークスキル【**蛮王の結束**】を持っています。敵を部隊単位でこちらに寝返らせれば、奴の優位性も崩されるでしょう。あのオークキングは、十万を超える配下を手に入れ、自分たちだけでこの城塞を落とせるなどと増長している愚か者に過ぎませんわ。この私、大魔族ジゼルとの格の違いというのをお見せしてやりましょう」

ジゼルは余裕たっぷりの笑みを浮かべた。

「なるほど……これが【**傾国**】のジゼル」

マエルの配下の騎士たちの顔が、心なしか明るくなった。

頼もしい味方の登場は、彼らにとって歓迎のようだ。

俺たちが負ければ、次はこの城が大軍に攻められるわけだしな。

もつとも、マエルの手前、その感情を表に出すことは憚っているようだが。

「それにオーク軍を蹴散らして力を誇示すれば、私の配下に加わるようオークどもを説得することが可能になりますわ。魔族は、強き魔族の庇護下に入ることを本能的に求めます。戦いが終わった後、オークどもは我が主ヴァイス様を主と仰ぐようになっていくでしょう」

「すげえッ……!」

ジゼルの話に、何事かと集まってきた兵たちが顔を輝かせた。

彼らはみな戦場では捨て駒にされる平民たちだ。

「俺たち、死ななくてすむんじゃないか!」

「か、母ちゃんと息子の元に帰れる!」

「噂には聞いていたが、これが新しい【**栄光なる騎士**】、ヴァイス様か! 大魔族を支配しちまうなんて、さすがだぜ!」

平民たちは、俺とジゼルを取り囲んで喝采を浴びせてきた。

王国軍は貴族である騎士と、平民である一般兵士に分けられる。

騎士たちは、魔族や魔物と戦って死ぬことが名誉であると幼い頃から教え込まれ、騎士学園で本格的な戦闘訓練を受けている。

だが、徴兵された平民たちはそうではない。

名誉より家族の元に生きて帰れることが重要だし、金がないからロクな武具も用意できず、身を守る力に乏しい。

死の危険が遠ざかるなら、これ以上、うれしいことはないだろう。

「……へえ、さすがは大魔族といったところやけど。君の【**傾国**】のスキルの発動条件は目を合わせることでしょ? それには相手と顔が見える距離まで近づく必要がある。その前に十万の大軍から

「斉に矢でも浴びせられたら、かなわんと違うか？」

マエルがせっかくの盛り上がりひやみずに冷水を浴びせるようなことを言ってきた。

「確かにその通りでございますな。おい小僧、おかしな意地など張らずに、マエル様に頭こぶしを垂たれるべきではないか？」

「力の強い者に従うのは、恥はじではないぞ」

マエルの配下の騎士が、俺に居丈高いたけがに忠告してくる。

「靴の裏を舐めろという話ですか？ それを受け入れたら、次はジゼルを寄越せとか、さらに無茶振りしてくるんですね？ それがヴォルドラン流の交渉術でしょう？」

ヴォルドラン公爵家はアコギな商売で財を成した家だった。

人の弱みにつけこんで脅迫きようはくし、一度相手が要求を受け入れたら、どんどんエスカレートさせていくのが特徴だ。

まあ、要するにヤクザの手口だな。

「ご心配なく。俺たちには作戦がありますので」

「ええ、その通りですわ」

俺の返答にジゼルが頷うなづいた。

ジゼルの【傾国】スキルの欠点は、俺ももちろん理解している。

それをカバーできる作戦について、すでに考案してあった。

「なんやと？ ……おもしろいやないかい。ほな、本当に君らだけで十万の大軍に勝てるか、試してみいや！」

吐き捨てるように告げると、マエルは踵かかとを返した。



やがて、十万を超えるオーク軍が地響きを立てて押し寄せてきた。

人間への殺意に満ちた軍団の行進は、ゲームとは違って威圧感が半端ではなかった。

エルヴァス城塞から出た俺とジゼルは、並んで奴らを睨にらんでいた。

身体の震えは、武者震むしやふるいだ。

元々、俺が用意した戦力のみで、魔族軍に勝てる方策を考えてきたのだ。

それを試す。十万の大軍なら相手にとって不足はない。

「……なんだ貴様らは!? 降伏こうふくの使者か!? 一万人の生贄いけにえを寄越す気になったか!？」

高価な武器に身を包んだ奴らの部隊指揮官——オーク・ジエネラルが俺たちを見咎みとがめて、声を張り上げた。

魔族の国ノクタリアは、一万人の生贄を差し出せば、侵攻を止めてやると脅迫してきていた。無論、そんな要求を呑めば、次は二万人の生贄を要求されるだけなので、交渉の余地などない。人語を解するとしても、魔族との関係は食うか食われるかだけだ。オーク軍は縄で縛った捕虜を、最前列に並べていた。生きた防壁だ。

こうすれば、俺たちが攻撃を躊躇うことを、奴らは長年の経験から知っているのだ。捕虜たちは背中に槍を突きつけられ、恐怖に震えながら歩いている。

力なく項垂れた彼らは、これから味方によつて殺されることを知っていた。

国王や【栄光なる騎士】は、少数のために大勢を犠牲にするような選択肢は決して取らない。人質ごと、敵軍を粉砕する戦術を常に選択してきた。

そんな命令を遂行しなければならぬ戦場は、まさに地獄だ。

もつとも、この俺は違うけどな。

いずれ【栄光なる騎士】として、王国軍を率いることになる俺は、兵たちから慕われる必要がある。

マエルのような上の者に嫌われたとしても、下の者に慕われれば成果は出せる。

そのために、捕虜を必ず助けると決めていた。

なにより、困難なミッションをクリアすることこそ、ゲームの醍醐味だ。

「そんなわけあるか！ お前たちこそ、捕虜を解放して、とつとと帰れ！ そうすれば命だけは助けてやる！」

俺は思いつきり挑発的な叫びをぶつけた。

「お前らごときの相手は、俺たち二人で十分だ！ 俺は【栄光なる騎士】のヴァイス・シルフィードだ！」

「なっ、なんだと……！ 貴様が、【栄光なる騎士】!?」

「それが事実だとしても、たった二人だと!? 俺たちをバカにしているのか!?」

「俺たちは天下のオークキング様に率いられた最強の軍団だぞ！」

「身の程を知れ！ 【七公爵】とて、オークキング様のお力を認めているんだぞ！」

俺の挑発に、十万のオーク軍の怒りに火が付いたようだった。

元々、好戦的な魔物たちだからな。

それが大軍を成せば気も大きくなる。

「……おもしろい。景気つけに踏み潰して、八つ裂きにしてくれるわ！」

オーク・ジェネラルが槍を天高く掲げて、全軍に突撃を命じた。

力自慢のオークたちが、人間の捕虜を盾のように構える。

これでは、魔法などで迎撃することはできない。

「死ねええええッ！」

奴らは雄叫びを上げて、襲いかかってきた。

まるで地上に出現した大津波のようだった。

「よし、ジゼル。アシッド・スライム、投下だ！」

「はい、ヴァイス様。さあ出番よ。大鴉たち！」

ジゼルが手を掲げると、近くの森に身を潜めていた魔物——千羽近い大鴉が一斉に飛び立った。

全長三メートルほどの超大型の怪鳥だ。

こんなでかい鳥が空を飛ぶなんて、やっぱりここはファンタジー世界だな。

大鴉たちは、足の爪で壺を掴んでいた。

彼らは突撃してくるオーク軍の上空まで壺を運ぶと、それらを先頭の連中の鼻先に落とす。

「ぶお!? スライムだとおおおッ!?」

「ぬぎゃああああッ！」

「熱ッ!? 身体が焼ける……!?!」

壺にはジゼルを使って支配下に入れた魔物——アシッド・スライムが入っていた。

粘着質なスライムに身体を包まれたオークたちは、その場に転倒して骨まで溶かされる。

アシッド・スライムは取り付いた獲物を強酸で溶かしてしまうのだ。

彼らは動きが鈍く、雑魚モンスター扱いされているが、上空から爆弾のように投下してしまえば、

ノロマという欠点はなくなる。

また、アシッド・スライムには、人間を決して攻撃しないように命令しておいた。

そのため、捕虜たちは無事な状態でオークから解放されて、地面に投げ出された。

「今よ、大鴉たち、人間を助けるのよ！」

ジゼルがすかさず命令する。

それに従い、大鴉が困惑する捕虜たちの肩を掴んで上空に飛び立つ。

「ぬあああッ!」

彼らは悲鳴を上げるがお構いなしだ。

少々、乱暴な救助方法だが、ここは我慢してもらおう。

「ま、まさか、捕虜たちを救ってしまったのか!」

「魔物同士をぶつけるなんて、すごい戦術だ!」

「見る、オークどもが自滅しているぞ!」

エルヴァス城塞から大喝采が上がる。

「止まれ、止まれ! 先頭にヤバイスライムどもが大量にいるぞ!」

「はあっ!? なぜ、スライムどもが、俺たちを攻撃してくるんだ?」

「良いから、止まれ! ぬぎゃ!?」

先頭のオーク・ジェネラルが全軍の突撃を止めようとするも、うまくいかに敵軍は大混乱に陥った。

車は急に止まらない、という奴だ。

しかも大軍であるために、後続の兵は先頭の状況がまったくわからない。

先頭の兵が急停止すると、勢いのついた後続の兵に突き倒されて、群集雪崩^{ぐんしゅうなだれ}となった。

重武装であった彼らは、自らの重量で味方を圧殺し、圧殺されてしまう。

「ぎゃああああッ!」

オークたちの断末魔^{だんまつま}の叫びが、戦場^{しじょう}に轟く。

この状況を引き起こすために、俺はアシッド・スライムを仲間に入れていたのだ。

大鴉は元々、ジゼルの配下だった連中で、これと組み合わせる戦術を思いついた。

ジゼルの配下の魔物は、大鴉以外はノクタリアにいて、ジゼルからの召喚を待っている状態にあった。

ただ、ジゼルが俺の配下となった途端に召喚ができなくなってしまい、俺の魔物軍団は、今のところこの二種類だけだった。

まだまだ、魔物の数と種類が少ないので、オークどもも、ぜひとも俺の軍団に欲しい。

【ワームホール】発動! ジゼル行つてこい!」

「はいっ!」

俺はユニークスキル【超重量】のレベル5の能力【ワームホール】を発動させた。

これは、視界の範囲内の別の空間に、触れた物体をワープさせるスキル能力だ。

神がかり的な力であるが、代償^{だいしょう}として、HP^{生命力}を五十パーセント消費する。

俺が触れたジゼルの姿が消えて、軍を立て直そうと号令をかけるオーク・ジェネラルの前に出現する。

「なあ……!?」

「お前には私を愛することを許してあげるわ。光栄に思いなさい」

オーク・ジェネラルの目を、ジゼルはじつと見つめた。

ジゼルと目が合った男性は、彼女に対し信仰とも言えるべき強烈な恋愛感情を持つ。

それは魔物であるオーク・ジェネラルも例外ではなかった。

「私は大魔族【傾国】のジゼルよ。お前は部下たちを率いて、オークキングに反旗^{はんき}を翻す^{ひるかえ}のよ!」

「はい、喜んでえええッ! お前たち、オークキングを討て!」

オーク・ジェネラルは大歓喜して、部下たちに味方を攻撃する命令を下した。

「は、はあ……!? いや、ジェネラル様、一体、なにを……?」
無論、奴の周囲の部下たちはわけがわからず、呆気に取られる。

「今から俺たちはジゼル様の配下だ! ジゼル様の勝利のために戦うのだ!」

「ちょっと違うわね。私の主は、ヴァイス様。ヴァイス様の勝利のために戦うのよ」

「は、はいいいいッ! ヴァイス様、万歳!」

ジゼルに間違いを指摘されると、オーク・ジェネラルは直立不動の姿勢で応えた。

「こいつは、ヴァイスの仲間か!? こいつを討てば……!」

オークたちがジゼルに襲いかかろうとするが、ジゼルは自分を中心とした放射状の雷撃を放って、彼らを蹴する。

そして、女王のごとく威厳たつぷりに命令した。

「お前たちも、この私に従いなさい! この大魔族ジゼルが、お前たちを庇護してあげるわ! ここで死ぬか、私の配下になるか選りなさい!」

「大魔族ジゼルだって!」

ジゼルが俺の配下になったことは、オークたちは知らなかったようだ。

下っ端の魔物は、こういった最新のニュースを知る手段など、まずないだろうからな。

「ごらんない、これが私の力よ!」

ジゼルが、手を振りかざすと、天から神の怒りのごとき落雷がいくつもオーク軍に降り注いだ。それは数千単位のオークたちを感電させて、黒焦げにする。

鉄製の重装備に身を包んで行進するオーク軍の弱点とは、雷撃だった。

なにより、一撃で大軍を蹴散らす天変地異クラスの魔法の視覚的効果は絶大だ。

「……こ、ここで殺されるよりは、ずっとマシだ! 俺たちはジゼル様についていきます!」

これを目の当たりにしたオークたちの一部が、ジゼルへの忠誠を口にした。

魔物たちは本能に忠実だ。

騎士のような忠誠心など持ち合わせておらず、生き残るために強い者に従う。

実は、これほどの規模の魔法を放つのは、ジゼルにとってもかなりの負担だったのだが、ジゼルは傲然と髪をかき上げて涼しい顔をしていた。

かなりの役者だな。

ジゼルの配下となったオークたちは忠誠心を示そうと、猛然と反転攻勢に出る。

「おい、オーク軍の一部を寝返らせてしまったぞ!」

「接近しないと使えない【傾国】の欠点を、あのようにして補うとは!」

エルヴァス城塞から、またしても大歓声上がる。

オーク軍は、いっそう大きな混乱に陥った。

今まで味方だと思っていた者たちが、突然、牙を剥いてきたのだからたまらない。

「私に忠誠を誓い、ヴァイス様のために戦うのよ！」

「はっ、はっはああッ！」

その隙をついて、ジゼルは【傾国】のスキル能力で、別のオーク・ジェネラルを支配下に入れ、部下ごと離反させるということを繰り返した。

無論、上官の寝返りに反発するオークもいたが、そういった者に、ジゼルは雷撃を浴びせて黙らせる。

「く、くそ、どうなっているんだ!？」

オークたちは、もはや誰が敵で味方かもわからない状態となった。

「ジゼルを倒せ！ 奴を倒せば、すべて解決だ！」

「その通りだ！」

中には冷静なオーク・ジェネラルがいて、部下たちにジゼルへの攻撃を指示する。

オークたちが一斉にジゼルに群がっていったが、【傾国】で洗脳されたオーク・ジェネラルたちが、盾となってジゼルを守った。

まるで女王を守る親衛隊だな。

「ジゼル様を傷つけることは、決して許さん！ ご褒美に足で踏んでもらうんだ！」

「えっ、ジゼル様に足で踏んでもらえるのか!? なら、俺様ももつとがんばる！」

彼らはジゼルの虜にされて、めっちゃめっちゃ奮起していた。

「うおおおッ、なら俺もジゼル様側に付く！」

さらに、オーク軍から、俺たちの陣営に寝返る者が相次いだ。

オークどもは繁殖力が強く、他種族とも交わろうとする性欲の塊みたいな連中だからな。魔性の女であるジゼルがいれば、離反させやすいとは考えていた。

しかし、足で踏んでもらえるのは、そんなにうれしいのか？

オークの性癖はイマイチわからない。

まあ、いいか……

「お前たち、雲梯を破壊しなさい！ 攻城兵器を潰すのよ！」

「ははっ！」

ジゼルの命令に、寝返ったオークたちは雲梯を斧や大剣で叩き壊した。肝心の雲梯を壊されてしまったら、もうオーク軍は城壁を登ることはできず、城攻めは失敗となる。

雲梯の数を減らすことは、敵兵を減らすことより、優先度が高かった。

「よし、狙い通りだな！」

作戦がうまくいって、俺はほくそ笑んだ。

大勢のオークが打ち倒されたことによって、戦場に『オークの斧』『オークの牙』『オークの腰布』といったドロップアイテムが大量に落ちだしていた。

それらはすべて俺のモノとなる。

これを狙って俺は、『幸運』の能力値にステ振りしていた。

この世界では、レベルが1上がるごとに、ステータスを上昇させることができる【能力値ポイント】を3ポイント手に入れることができる。

そして、『幸運』の能力値が上がると、ドロップアイテムの出現率が上がるのだ。

これは、ゲームではパーティーメンバーが倒した敵にだけ適用されていたが、ジゼルの配下である魔物が敵を倒した場合にも適用されることを、俺はここ数日の検証で知っていた。

手に入れたドロップアイテムを売って、俺の魔物軍団を強化するための装備やアイテムを買うというのが、俺の新しい戦略だった。

そうやって強化した魔物軍団に魔物を倒させて、彼ら自身のレベルアップを繰り返し、さらにドロップアイテムを手に入れて、どんどん強くしていく、という構想を練っていた。

【速度】の能力値が、俺の【超重量】のポテンシャルを引き出す上でもっとも重要だ。

ただ、『幸運』の能力値は、回避率やクリティカル率をアップさせる効果もあるので、これを多

少伸ばすのも悪くない選択だった。

ちなみに以下が、現在の俺のステータスだ。

||||||||||||||||||||

ヴァイス・シルフィード

レベル40 (UP!)

クラス…マスターシーフ

筋力…4↓5

速度…116

防御…2

魔力…20

幸運…4↓19 (UP!)

ユニークスキル【超重量】レベル6（UP！）

レベル1。太りやすくなる。

レベル2。『重量操作』触れた物体の重量を増加できる。

レベル3。『体重操作』体重をコントロール可能になる。

レベル4。『超重力』手で触れた場所に、五秒間、使用者を除くすべての物体を引き寄せる超重力フィールドを発生させられる。

レベル5。『ワームホール』視界の範囲内の別の空間に、触れた物体をワープさせる。

レベル6。『指向性引力』指定した対象を手元に引き寄せる。

レベル7。?????。【超重量】を使用して、レベル60以上の敵を3体倒すことで解放される。

コモンスキル

【盗む】
スチール

【気配遮断】

【光学迷彩】
ごうかくめいさい

【HPスナッチ】

【強奪返し】

【罨破り】
おなげり

【ステータス隠蔽】
いんぺい

||||||||||||||||||||

「ジゼルを相手にするな！ その主であるヴァイスを叩け！」

その時、奴らの中から、天を突くほどの巨体のオークが現れ、命令を発した。

まばゆい黄金の鎧よろいを身に着けたこの個体こそ、最大の標的であるオークキングだ。

「しょせんは、運良く大魔族を支配下に入れてイキリ散らしてる小者だ！ 奴を倒せばジゼルも我らの側に付くはずだ！」

「その通りだ！ ジゼルの相手にすれば洗脳されてしまうぞ！」

「ヴァイスに向けて、一斉突撃だ！」

オーク・ジェネラルたちが先頭に立って、俺に向かって怒涛どとうのごとく攻め寄せてきた。壁役のアシッド・スライムは、呆気なく蹴散らされてしまう。

だが、敵総大将のオークキングが見える距離に現れてくれたのなら、もはやこっちのものだ。むやみやたらにオーク軍に攻めかかれれば、マエルの指摘通り、俺は体力と魔力が尽きて殺されるだろう。

もっとも、敵将を討って離脱することを目標とした短期決戦なら、話は別。

雲梯を潰した上で、オークキングを倒せば、この戦いは俺の勝ちだ。

奴らは、撤退せざるを得なくなる。

「はああああッ！」

俺は地面を蹴って、風魔法による気流操作で猛烈に加速した。

同時に、コモンスキルである【気配遮断】と【光学迷彩】を使う。

【気配遮断】は音や気配を完全に消すことができるスキルだ。

【光学迷彩】は、カメレオンのように周囲の景色と自分の姿を同化させて、敵から発見されなくなるスキルだった。

「はえ……!？」

俺を見失ったオーク軍は、呆気に取られた。

さらに俺は、風魔法と【超重量】のレベル3の能力【体重操作】を併用し、壁となつて群がる敵兵を大きく跳び越える。

「ぎゃああああッ!？」

着地して邪魔な敵を薙ぎ払う瞬間、俺はユニークスキル【超重量】レベル2の能力【重量操作】で、剣の重量を十倍に引き上げた。

攻撃力とは『重量』×『速度』であるため、この一撃の威力は絶大だった。

巨漢のオークどもが鎧ごと粉碎されて、ぶっ飛ばされる。

さらに、コモンスキル【HPスナッチ】によって、これまでのスキル行使で失ったHPをバッチリ回復できていた。

【HPスナッチ】は、与えたダメージの五パーセントのHPを相手から奪って、自身のHPを回復できるという超便利スキルだ。

攻撃力が高くなれば高くなるほどその効果を増すので、【超重量】との相性はバッチリだ。

【超重量】は代償として、使う度にHPを消費するのだが、攻撃を命中さえできれば、その代償をチャラにできた。

俺は邪魔なオークどもを血煙に変えて爆走する。

【気配遮断】と【光学迷彩】のスキルを破れるような敵の魔法使い——オーク・シャーマンが前衛にいなかったことが幸いし、俺は敵兵を一方的に蹂躪しながら、オークキングを目指すことができた。



「こ、これが、【^{グロリアスナイト}栄光なる騎士】のヴァイス！ 本物の実力者じゃないか!?」

「大魔族ジゼルを支配下に入れたことだけはあるぞ!」

「お、俺たちなんかじゃ、まるで相手にならない!」

オークたちの士気がダダ下がりになる。

奴らは明らかに逃げ腰になった。

「ふん、当然よ。この私を倒したヴァイス様が弱いわけがないでしょう。さあ、オークたち、勝敗が決した後の投降は認めないわ。今ここで、ヴァイス様に忠誠を誓った者だけが、生き延びられると知りなさい!」

オーク軍の中心に、ジゼルが魔法で巨大な竜巻^{たちまき}を発生させた。

これは雲梯の破壊を狙ったもので、ジゼルはオーク・ジェネラルに我が身を守らせつつ、この大魔法の詠唱^{えいしやう}を行っていた。

大勢のオークたちが雲梯と共に上空まで巻き上げられて、奴らは壊滅的な被害を受ける。

よし、これでまともに使える雲梯はほばなくなったはずだ。

「無理だ。勝てっこない! 俺は今すぐ、寝返るぞ!」

「俺もだああッ!」

「お願いします! 俺をジゼル様の奴隷^{じれい}にしてくださいいいいいッ!」

「誓います！ ヴァイス様に忠誠を誓います！」

大量のオークたちが泣きながら、寝返ってきた。

中にはジゼルの奴隷になりたいとか、変なことを叫んでいる奴もいる。

奴らの恐怖心を煽るためにも、ジゼルは見た目が大迫力のこの魔法を使ったのだ。

おかげで、ジゼルの魔力の大半が失われたが、それに見合うだけの戦果が得られた。

戦況は俺たちに大きく傾く。

「おのれ、ヴァイス！ このオークキングと正々堂々と一騎打ちにて勝負しろ！」

すると、オークキングが大剣を振りかざして叫んだ。

「おおおおッ！ キングが一騎打ちをされるぞ！」

「キング、万歳、万歳！」

まだ寝返っていないオークたちから大歓声上がり、太鼓やシンバルが派手に打ち鳴らされる。

オークにとって、強いオスを決める一騎打ちは、最高に盛り上がるお祭りなのだ。

なにより、味方が減れば減るほど、オークキングのユニークスキル【蛮王の結束】^{バリーブレス}の加護が失われるため、今のうちに一騎打ちを仕掛けてきたといったところだな。

これ以上の配下の離反は、奴にとって致命的だ。

まさに、俺の狙い通りだった。

強いオス決定戦が好きなオークの習性として、一騎打ちを申し出ておきながら騙し討ちをする、

味方に加勢させる、ということはない。

「いいだろう。受けて立つ！」

「うお!? もうこんな近くまで……！」

「は、速い！ 恐るべきスピードだ！」

【気配遮断】と【光学迷彩】を解いて姿を見せると、オークキングとその側近たちが目を丸くした。俺はすでにオークキングの目と鼻の先まで近づいていたのだ。

不意打ちを喰^くらわせることも考えたが、俺よりも20レベル以上も上で、防御力の高い鎧で全身を覆っているオークキングを一撃で仕留めるのはさすがに難しい。

オークは高いHPを誇る耐久型の魔物だ。

さらにオークキングの周囲には、魔法が得意なオーク・シャーマンたちが控えていた。

不意打ちをかけて一撃でオークキングを仕留めきれなかったら、俺はオーク・シャーマンの探知系魔法で【気配遮断】と【光学迷彩】を破られて、タコ殴りにされるだろう。

「グハハハハッ！ おもしろい！ さすがは【榮光なる騎士】^{グロリアスナイト}！ では行くぞ」

オークキングは大剣を抜いて、叩きつけてきた。

俺は最小限の動きで、その剣を躲^{かわ}す。

オークキングの剣は大地を断ち割り、余波でふっ飛ばされそうになった。

おそろく、かすただけで身体が砕け散るだろう剛剣だった。

しかも、それが怒涛の連続攻撃となって、降り掛かってくる。

こいつは、スピードもなかなかのものだな。

しかも、剣技も達人級だ。

それ故に、接近戦に持ち込まれると、反撃の糸口が掴みづらい。

俺はとにかく回避に専念した。

「そらそら、躲すだけでやつとか!？」

何度も攻撃を避けることで、俺は奴の剣技を見切った。

こいつは、大上段に構えて大振りする際に、剣を地面に叩きつける悪癖があった。

おそろく、大地を割ることで自分のパワーを誇示したいんだろうな。

しかし、そのことによって、剣を振り戻すのにわずかな遅れが発生していた。

その瞬間こそが、俺の付け入る隙だ。

ゲームでも敵の攻撃モーションの癖を見切るとは重要だったが、これはこの世界でも同じだった。

「うお……!？」

俺は大振りを誘うために、わざと体勢を崩したように見せかけた。

「死ねええい！」

チャンスと見たオークキングは、剣を大上段にかざし上げて叩きつけてきた。狙い通りだ。

攻撃を躲した俺は、奴の大剣が地面を割った際に生まれる一瞬の隙を見逃さなかった。

強引に手を伸ばし、大剣に触れることに成功する。

「【超重量】！」

「剣が……!？」

オークキングは突如重量が激増した剣を持ち上げることができずに、身体のバランスを崩す。

【超重量】レベル2の能力【重量操作】で、奴の剣の重さを千倍にまで引き上げたのだ。

代償として俺はHPの一割を失ったが、これで奴の剣技を封じることができた。

オークキングは何が起こったかわからず、混乱状態に陥る。今が、最大のチャンス！

俺は防具として左手に装着していた【地竜王の小盾】で、オークキングの頭を殴りつけようと

跳躍した。



「……クソが、なんやねんあれ」

エルヴァス城塞の城主であるこのワイ、マエル・ヴォルドランは、周囲の大歓声をよそに舌打ちをした。

あのいけ好かないクソガキ、ヴァイス・シルフィードに上下関係を叩き込ませ、ワイの子分にしようと考えていたのやが、当てが外れたところやなかった。

ヴァイスは、大魔族ジゼルと共に十万のオーク軍を翻弄し、敵本陣にまで迫りおった。

あいつら、予想外の強さや。

「おおっ！ ヴァイス様とオークキングとの一騎打ちだ！」

「ヴァイス様はまさに英雄だ！ 捕虜を救い、敵総大将の喉元にまで迫ったぞ！」

「万歳！ ヴァイス様、万歳！」

あつという間にオークキングとの直接対決を実現したヴァイスに、ワイの配下の興奮は最高潮に達しおった。

それは平民どもだけでなく、貴族である騎士たちも同じやった。

「あやつの実力は本物だったか……！」

ワイと共に、ヴァイスを屈服させようとしておった腹心の騎士どもまでもが感嘆しておった。

これじゃ、この最高指揮官としてのワイの面目は丸潰れや。

本来は、籠城して敵軍を追い返すのが、ワイの作戦だった。

なにしろワイのユニークスキル【絶対氷界】^{ニヴルヘイム}は、籠城戦向きや。

これはワイが視界に収めた空間の気温を、マイナス八十度近くまで低下させるスキルやった。

このスキルの補助によって、氷の魔法の威力と効果範囲を高め、敵の大軍を氷漬けにして倒すの

がワイの得意な戦法や。

欠点としては味方も巻き込んでしまうさかい、籠城戦が一番ということになるんやが……

「なんと頼もしい！ オークキングの攻撃をすべて捌いているぞ！」

「アルバン様のご子息とは聞いていたが、ここまで強いとは……！」

「ジゼルのおかげで敵が次々と寝返っているぞ！ これまでの戦の常識が覆るのでは!？」

「まさにその通りだ！ 見ろ、もはや敵軍が二つに割れているではないか!？」

「素晴らしい！ さすがに国王陛下をお救いし、セリカ王女の御心を射止めたお方だけある！」

「声援を送るのだ！ 少しでもヴァイス様のお力にならねば……！」

クソおもしろくないことに、城塞のほぼすべての者がヴァイスを応援しだしおった。

地味なワイの籠城作戦に比べたら、確かにたった一人で大軍に立ち向かうヴァイスは英雄に見えることやろう。

ちっ、なんともいけ好かないガキや。

ワイは現在、十九歳。

もう三年ほど生まれてくるのが遅かったら、まだグロリアス騎士学園の学生やった。

もしそうであつたら、ワイこそがセリカ王女の婚約者の座を射止めることができたに違いないんや。

国王陛下は、騎士学園でランキング一位を取った生徒に自分への挑戦権を与え、もし自分とのバトルに勝利したら、セリカ王女の婚約者になると約束しておった。

ありえへん、破格の報奨や。

まさか、自分の娘を餌にするとはな。

それだけ、本気で優秀な騎士を育成したいちゅうことや。

これがワイにはおもしろくなかった。

なにせ卒業生のワイには、この王女争奪戦の挑戦権が与えられへんのやから。

だが、国王陛下はこの国最強の戦士や。

どう転んでも、たかだか学生が国王陛下に勝てるはずがないと高を括くくっておった。

唯一、国王陛下に勝てる可能性があったら、フィアナ・ブレイズ公爵令嬢やが、女子生徒ならセリカ王女と結婚できへんので問題あらへん。

結局、セリカ王女とそれなりに歳の近い、このワイが王女の婚約者となり、ゆくゆくはこの国を支配できると思っておった。

しかし、誰もがセリカ王女の婚約者の座を狙っておったのに、あのヴァイスは王女に告白して恋人同士になるという横紙破りをしおった。

ワイの計算を狂わす腹の立つガキや。

これで、王女争奪戦の勝者が現れなかったら、王女の婚約者はヴァイスということになるんやないか？

その上ヴァイスは、ラッキーで大魔族ジゼルを配下にし国王陛下を救ったことで、ワイと同格のグロリアスナイト【栄光なる騎士】になりおった。

未だに学園一位にはなっておらんかったので、悪知恵わるぢえが働くだけの小者だと思っておったのやが……

ここでオークキングを倒してしまったら、奴の実力はまさに本物ということになる。

ヴァイスがこのまま成長して力を付け続けたら、いずれは国王陛下にも勝って、セリカ王女と確実に結婚してしまうやろ。

それは、アカン。それは許せへん。
ヴァイスはたかだが伯爵家出身。

ヴォルドラン公爵家に生まれたサラブレッドのワイより身分は下や。

そないな奴が、王配（女王の夫）になって、このワイが頭を下げなあかんくなるやと……？

「……ふざけるなや」

ワイは血筋だけの男やない。【^{グロリアスナイツ}栄光なる騎士】になるために、血の滲^{にじ}むような努力をしてきたんやで。

それもこれも、いずれはワイがこの国の頂点に立つためや。

王家の親戚筋のワイには、国王となる資格がある。

それを邪魔する奴は、今のうちに消すしかない。

そうや。今、この瞬間が最大のチャンスや。

「マエル様！ ヴァイス殿を援護しましょう！ 我らも打って出るべきです！」

「オークキングに勝っても、敵陣に取り残されてはヴァイス殿の身が危ういです！ あのお方を見殺しにしてはなりません！」

「どうか、ご決断を……！」

ワイの腹心の騎士たちが、次々にヴァイスの援護と救出を上申してきおった。

こいつら、最初はヴァイスを嫌っておったというのにな。

腹の立つ話やが、これはまさに渡りに船という奴や。

「まったくもってその通りや。ワイが氷系最強の魔法で、オーク軍を蹴散らしたる！ その後、城門を開いて、騎馬隊の一斉突撃や！」

「おおおおおおッ！」

「さすがはマエル様、やってやりましょう！」

ワイの命令に、城内の兵たちは剣や槍を掲げて沸き返った。

天を震わせるほどの土気の高さや。

ワイは唇の端を釣り上げて、最強魔法の詠唱を始めた。

これはあくまでヴァイスへの援護、オーク軍への攻撃や。

ただ、最強クラスの氷魔法となると、ワイでも制御が、ちと難しい。

それが運悪くヴァイスをかすめて、それが原因で奴がオークキングに負けたとしても、オークどもになぶり殺しにされる羽目になったとしても。

まっ、それは不幸な事故というやつちゃな。戦場ではよくあることや。

ワイのためにこでくたばってくれや、新たな王国の英雄くん。